

8 長理第 93 号
令和 8 年 8 月 1 日

会員各位

(一社)長野県理学療法士会
会長 林 有理
第 55 回長野県理学療法学会大会
大会長 牛山 直子

第 55 回長野県理学療法学会大会開催報告 および表彰演題の公表について

2026 年 6 月 20 日（土）～21 日（日）の 2 日間、下諏訪総合文化センターにて、第 55 回長野県理学療法学会大会（ハイブリッド形式）を開催し、盛況のうちに終了いたしました。

現地参加 324 名、オンライン参加 2,001 名を合わせ、合計 2,325 名という多くの皆様にご参加いただき、心より御礼申し上げます。今大会のテーマ「理学療法再考～振り返りからの発展～」にふさわしい活発な議論が交わされましたことに、深く感謝申し上げます。

また、一般社団法人長野県理学療法士会「学会大会表彰規定」に基づき、同大会の発表演題に対する学術表彰選考会議が開催されました。選考委員による厳正なる審査を経て、各賞が決定いたしましたので、ここに選考理由とともにご報告いたします。



最優秀賞

【演題名】 高齢循環器疾患患者における5回立ち座り検査は複合イベント発生予測の有力な因子である

【所 属】 信州大学医学部附属病院 リハビリテーション部

【氏 名】 山本 周平 先生

【選考理由】

本研究は、高齢循環器患者の評価において広く用いられている SPPB の天井効果という臨床上の課題に対し、その構成要素である5回立ち座り検査（5STS）の長期予後予測能を他の身体機能指標と比較検証した点に高い新規性が認められる。340例の対象データを用い、多変量解析やROC解析を組み合わせた適切な統計手法によって検証されており、客観性と論理性を兼ね備えている。特別な機器を必要とせず短時間で実施可能で実臨床に反映しやすく、循環器理学療法における評価の臨床価値を高める理学療法学への貢献性が極めて高い優秀な演題として選考された。

優秀賞

【演題名】 脳卒中患者における主観的・客観的アウトカムの乖離と定量化手法の比較検討

【所 属】 長野保健医療大学 保健科学部 リハビリテーション学科 理学療法学専攻

【氏 名】 荻原 啓文 先生

【選考理由】

本研究は、脳卒中患者における転倒不安等の主観的評価とバランス能力等の客観的評価の乖離に着目し、その定量化を行う複数の標準化手法を比較した点に独自の臨床疑問から出発した新規性と独創性が評価された。統計データに基づき、Z-score法が天井・床効果の影響を受けず臨床的なズレを最も安定して定量化できるという妥当性を示している。解析の論理性が一貫しており、臨床における主観と客観の乖離をわかりやすく分析する客観的な方法論を提示したことで、今後のリハビリテーション評価の質の向上に寄与する優れた研究であると評価された。

優秀賞

【演題名】 大腿骨近位部骨折術後患者の入院時背景に基づくクラスティングと機能的転帰の探索的検討

【所 属】 岡谷市民病院 リハビリテーション科

【氏 名】 唐澤 昂大 先生

【選考理由】

本研究は、大腿骨近位部骨折患者の多岐にわたる背景因子に対し、クラスティング手法を用いて3つの表現型（タイプ）に分類した点に新規性が認められる。400例以上の豊富な臨床データから、適切な解析手法によって各クラスターの転帰やリハビリ提供量の特徴を可視化しており、研究の客観性・論理性・妥当性が高い。患者特性に応じたリハビリ計画の個別化や入院時のリスク層別化の可能性を示しており、他職種との共通認識の形成にも有用で、実臨床に直結する理学療法学への貢献性が高い研究として選考された。

学術奨励賞

【演題名】 ADL 改善とリハビリテーション実施量に基づくリハビリテーションの効率を規定する因子の検討

【所 属】 信州大学大学院 総合医理工学研究科医学系専攻
信州大学医学部附属病院 リハビリテーション部

【氏 名】 中屋 遥 先生

【選考理由】

本研究は、長野県士会データベースに登録された 2,233 名の大規模データと高度な混合効果モデルを用い、大腿骨近位部骨折患者におけるリハビリ効率の規定因子を多角的に検証した。術後 3 日以内の早期歩行開始が効率を改善させる有力な促進因子である一方、単位数決定に施設因子が強く関与している実態を精緻に導き出しており、高い客観性と妥当性を担保している。医療資源逼迫という課題に即した論理的な考察を行っており、効率的なリハビリ提供体制の構築に資する成果として、若手発表における高い将来性と発展性が認められた。

特別賞

【演題名】 急性期病院における大腿骨近位部骨折周術期リハビリテーション提供体制の実態
：多施設記述疫学研究

【所 属】 富士見高原病院 理学療法科
信州大学医学部保健学科基礎理学療法学

【氏 名】 黒部 恭史 先生

【選考理由】

本研究は、県士会データベースの急性期 12 施設・2,197 名の大規模データを記述疫学的に分析し、これまで診療実態が明らかでなかった施設ごとの提供体制のばらつき（格差）を客観的に可視化した点において、極めて高い独自性と特殊性が認められる。早期歩行練習の開始割合や OT 介入量などに施設間で大きな差がある実態を明確に浮き彫りにした。周術期リハビリテーションにおける標準化指針の必要性という重要課題を提示しており、理学療法の質向上や地域のリハビリ提供体制の発展に大きく寄与する理学療法への貢献性が高い有意義な研究として選考された。

以上